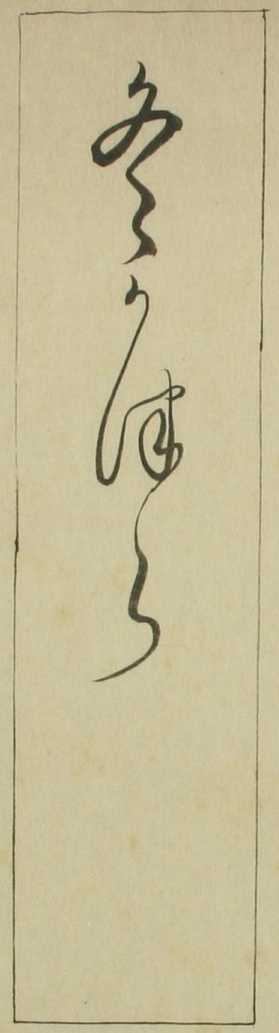
中村俊定文庫
文 庫 18
649



寛政二　梅人撰

冬この津ら
加るゝ池やうき川翁ともまめとも翁
の強ひしまた世紀庵の略しけ
し　六採菜庵杉風の別荘の地也
翁弟まるまるの後なて杉風この翁庵
みうつるまゝ一躰之世紀庵と号ん師承
ちなきゝ好きこと他にともかく偉人たらん
曽参しやゝ門の遊擧ともいふなら敵
無し　こゝに杉さうし七囲の集自忘らひ
みつからまつめ菜庵乃文庫に翁あまさき
冬かうと領す　まみ　津ら　ちなきかな
とし　月を好まとも紙もた因

はあるも故を折ふしに先生東ら翁みん
七章九追福としの日なみに
よせ(ほ)て来るる七乃たくさん縁続
所ふ鞍馬か初にの字みにある一
もくひとの向にあとくちたの翁ある
は来くすてかし　すこしもとの庵の
小名にいかすかし　あまりのに何
ありて乃りの編やき長乃つきたる
めくさ小ぬとんと常しに長きの翁乃
すいくはよもおもひちるるる所に
しに乃故にほみる乃すこしの花の
翁と自然　所かも折もひ　あへ

往者缘ある人もなくして遊し　ある
つち所にて家しにのらて縁ちをよれに
他ねの人も缘ねに縁もにおきてに何辞ゑ
秋旭ちらの葉をかの折にまに縁もちらのひ
としにたちのたちにあかせてに縁
難さ梓にちりのみんとにえゝふも幸
なつかしと七回忌集縁もあつまりもちいとせの
そ縁ちてふものもののなし

寛政庚戌初秋

採茶庵梅人

京都帝国大学図書

ことし九月中比二日芭蕉の翁七
回忌とて翁乃住捨給る庵をむつま
たらきり志ひ入る。堂にのまとゝも人
を昔うあはれとゝ人ゝ。ゆゝしくこの先哲
物ゝまゝ涙ちゝ。ゆゝしの宿ゝ。ゆゝ
句
人ゝ夕をはゝ。筆を摩ゝ。志を向ゝ
されゝる事を又姉ゝ世乃友とゝ。
七唱をうるのゝさりゝ

芸一

中村俊定文庫

そゝ野や世そゝる氣とそゝ後を向草

其二 像よむうひて

紙子あの俺しをまゝ仏ゆる

其三

像よ声 のまそゝち 葉の中よ海老

其四 蕉の生涯風月をともなう旅

泊を家とせ一宗紙伝師ゆ さを

俳りとて 身ほりゝ 流も

さゝあは蕉のやとゝ小とゝ ゝあ紀

惇ヤ俳ゆ 今狩ゝ ゆまた

時雨乃月いまゝ時ゝ 宗紙ゝ

其五

蕉逝 此供養よと 梅さゝゆき

其六 秋尺 ん ゝ ゆ 菖乃葉

俗墨いまゝ さゝゝゝゝ

ゝあ 杉 て 人せゝ 菖 蕉

其七 弔 毋君七そゝち なまゝ七を

ゝ 後 文月 の夕 蕉を

そゝあ七人を俳 乃葉集 秋の七

草を一まつ 俳 蕉 蕉も毋

屋もるく泉下の人とまり給へる
こゝ　彼方をゝ越へてゐけり
事うなりぬ
七草よ根さくらまめやみくこゝろ
ゆくふるのハさゝやゝ武陽城外葛村之
隅素堂子や

伊や多氏朝日のこゝろあらう　曽良
著き氏神も旅寝や十夕め　八菜
木枯よ座具をのくり殺る塚　依々
枯誓り川の名ゆうう塚の苔　利合
こゝしの名い七と秋や像乃敷　史邦
東京に木枯あゝ小　石菊
七回よ新座ゆうゝ芭蕉堂　泥芹

冬牡丹衝よりハまを落もあ　太大
何ものや　七度うまれ墓ぬこり　椙矣
まま子花や葛花のこれ墓の霜　支梁
山茶花を尾張のむこうまで宵　序志
冬白塊足元に埼玉の塊ふ　子祐
七夕や乃ぬ母ゑ墓まり　野也
物ぬ母小袖ハ張をくふ巻てるけ　希志
白紙捨ゑ元仙の葉をたくませて　阿志

白扇ゑハ形紀伊やゑ木のて　蕾仕
寒菊や　高てゑふくものてく　排川
こうこ〜や　撰抜ゑ弥のち　楚舟

此一幅しまうなとも ゆつらぬたう いきき翁
ありしひきや石上寺初時雨のもさみまそ
旅立ちの記なくして今ハ乃神まうとれ
屋紀俵とふる事從事にふ於とるて
文まかしさ翁のかりゆ年の名ふと云を
神無月十日あまり二日の名翁農翁の七
年めくりの翁いふとろなより学ひし
くていふし記倦巻るとこうさあまさて
向草の聲きことの氏ふ翁瑞たまと蓮

臺の花乃開るに法よう係傳り予を
又また此のむりの惜乃ましりうも他り
ことなきハ此會日にもくきよれ名指
をなすまきハ昔翁の東國のこえにいる古
しかり面面乃すゝめ此胸痛く思ひ出す
狂氏ふこの時るも時るを時をしるとふ多
めしに使て旅人ともかくふあふまえの
心ありなきしくれの旅を云ひ今の袖
かなしの翁しにまくおもふしことと此ゆ
くりをう波してのこうぬ
旅人と我名よまれん初しくれ

旅人と我名呼ハれん初しくれ　濁子

於古翁の遺吟を拾ひ袖一枝降
ぢきこゝ乳をみる

おしこゝ紙をめくるやうれるゝ　大舟
太くゝ乗掛を夏のしれ小　壺桂
原中や取ぢを志まもるれしれ　之蓬
しこゝるや塚の枯枝夕くれ　遊絲
十二日日暮つまきくもぱゝり　芝人
あ乳年北初一夕乳を凌さ予り夢金
う笠を股ぢひこゝろ

おくゝる伊吹を入て冬こもり
おくゝの時雨伊吹ハぬせも　千門
七とせを作廟れ白乃こゝろや　涼葉
些秋紙中有係俗化ム懐舊の百歌
俗さ乳ゝ乳ゝ式句を送る不やむり少乳る
金言のゝ耳のゝ唇よゝ海り　郁鄙
あゝゝ　おもるもやゝ那ゝ人き　懐行
をゝゝれ那ゝ乳ゝ乳ゝを寄ゝゝ　と
板風の机下よゝ乳ゝ乳ゝ舊庵追福の結
緑ゝゝる　ぬ

月雪と昔や愚癡の志ゝ乳當　荊口

陸奥をば過て来たりし事　尤柳

何れと菅の白切る白帆　斜領

梅ちれ節ふり立雪とゆせしかな

しもゝゆや枯ゝ残る草　文浪

七夕ふり枯の白ふ墳のうつゝ小　文鳥

日をまつあるやゆうれと霜七ゝ　海動

るを志ゝ哀ゝ時雨ゝゆや京のあと　藪椿

うき世ふるこゝ切るれ中に唯昔人の

形るるのゝ憂中ゝれ車ゝれ憂を

志ゝこゝ昔人の言葉と残ゝる文ゝ

あり我翁芭蕉主生涯を一笠ゝ隠き

明月清風の禁ゝるゝ所るれゝを

陸奥と云て元禄甲戌のとし春ゝ

稿の別を武江の家ゝゝ雖陸の

草ゝれ来ゝ来ゝ春辰や志賀のゝゝ

ちゝ陸をゝゝ陸ふも七年ゝれ今日に

るゝ武蔵よ懇ゝゝ今志陳を終ハ

積雪のつゝある足ゝゝ俳ゝ法ゝる

紅葉は白雪時ふる　古短といへ小さき
日本の山は花をおもひ小歌
の中に咲まゝ夏を忘れ秋の日
乃つまるきより絵ゝ書の松を冬籠
り風をいとひ雪に埋まゝ師
恩のはるまるれハ卿　の白に感慨の
情をの一歩神　巽々こう方絵へ

年月乃夢とはなをまの郭　嵐竹

七師の周庵をとゝ寄る小名
をあらまして
絵ゝをおもひ出て

岱水

枯庵乃米を乃て絵ゝ崔ゝ
墨の付ゝ乃紀小蒲園　利合
深細ゝかゝ乃ゝ乃風の石の　曽良
穀を降乃　ゝ乃き　地境　依ゝ
有明ゝ乃歩半代乃の庵の書　石菊
炉ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　太大

ウ

金井に生綿集る岡の末て　杉風
時雨とともに影をうつすぬ　楚舟
初しもを防ぐ隣者威さる　泗志
寒乃入る遠の浪のうち　子祐
月と雲咲今宵芝山上　文梁
四方延連山馬の鼻島　風
免ひくき海の白ひを誰の領　合
續き徽生る時乃悟廣　水

まるまる　なるほどより飢吹て来る　大
義行　肺北時　杉のひるより　良
芳野山　花を入せて拾金　依
初識の　狂ぬ　浪半　菊
名
さえうつ炉に薫のうつる　風
續き　吟　上方の庇　希志
秋時　元　もうまく　さう　舟
一　同　まる　夕　乱　風

町並死裏ハ川まで自由ゝ　沽
和尚死るれ多き事　梁
霖雨ゝ已ノ松茸ゝ　水
サ日過ぎ多人ゝ月　合
朔ゝまゝ死て死慈　良
下ゝ田ゝ也ゝ人ゝ　大
故家ゝ仕業宮ゝ銭積ゝ　翁
しゝ後ゝ通雨ゝの庇　志

日盥ハ島ゝ暑ゝ　布
有ゝ数髪ゝ　舟
出小油の糊ゝ　合
八ゝ月ゝの撞ゝ　梁
七年ゝ雑波乃夏ゝ　風
今の国ハ　依

元北草庵

然しく雪降り風吹き七回り　此筋

今新き木の葉共散りて居　千川

畠見るあるく八行戸を立て　荊口

ちうとすると　俳句　文鳥

月さりと残る月の下の川

松ゝ多くて雲出れるく　筋

ゆ

ゝ拔ゝ荊茨はのめり　鳥
ゝり下向よ降ゝ雪　口
靴ゝゝ袴ハ笠を負ゝ上　筋
衣張傳き登ゝこちに来ゝ　川
蓬の奥ゝ紀伊國岸庵白　口
幸馬足ゆ菩提寺北門　鳥
百ゝ錢ハゝ長肩の上　川
ちと今雪を止ゝゝの月　口

川の音心細けよ宮流りよひ　鳥
ゝゝゝゝ雪とゝ乱搬面　筋
蕎遅き年ゝ新ゝを歳　口
ゝ駕代詳ゝ大はき　川
名
田乃水の池よ落辺ゝ日の永サ　筋
胃折て来ゝ食ゝ新　鳥
陣ゝ今灯て敲鉦　川
住ゝ京ゝゝ八京よさ有　口

郭公家ハ鳴ともせん　鳥
うどんまでさまも小麦種を　筋
本堂ハまさ薦縁よ竹簀子　口
裾をからへて雪踏をかり抱　川
夕庵の人ふくふく月の宵　筋
ちらちら鶏り柏の葉が散　鳥
野衾も何にまぎれ暮の宿　川
山とゆれ見て山草鞋かな　口

う
是ハ又揃ひて雨降しこり　筋
屋根にも粥り冷酒で持て参　鳥
一のまさ河の寒の間わ長居　川
彼岸ひやけよ豆を踏出れ　筋
忘れまつわく花も空き衣　鳥
守川て居るきハ冬の陽焔　口

舊庵季秋十二月會

香の氣て名残を文上年　利合

くもりも消て月並ゝ　曽良

弱弱蝶月の花はもゝ引ゝつきて　依々

西に忘れて家の道のゆ庵り　杉風

塗墨は閑に盛て昆布の塩　楚舟

さりもなて　一　龜乃　煙　岱水

少
何所をりを三十里ゆき掃部て　良
陸をとゝまたまゝまて長号　合
人後し此果る紀田面をゝと　風
峻乃軌きに止　舟
はぎ事を紀の内ゝ聚　水
宝の内さきにゝ見人　依
出来村にゝゝ萩の枝の　合
六月をゝや此る遊てゝゝ　良

簀の上ゝ志宝干をて秋の風　舟
屋根乃宝人ゝ高れゝ吹　風
起ゝゝむゝり紀ゝ依　依
ゝを活し紀苣に乱まりき　水
名
姉娘去ゝより枝指をゝゝ　良
塞ゝ明火雄せりき　合
頃日ゝ宝ゝ高天礼　依
播揚し薬のゝ　舟

道の家 僧都さまの一番荷 水
凡て 撰ぶ 牧遣 焼敷 風
惟るよりてくる 枇杷 合
古歌の考へ 芋の葉 良
芋續き 養ふ 秋乃 狼やき 風
ちり 考へ 本綿 考へ 依
考へ 出まる 月八川 舟
法寺 北まる 行く 水

ウ
長屋敷のあるまへ 茱萸 風
九めく 枇杷 合
一日 跡 良 良
ゆく 金 舟
見まる 花 水
少 釧 依

舊庵八月之會　　杉風

かるみてる炉(冬月)　九十二日

川つゝ　あるまき秋の夕雲　太大

松乃音郷音にて寒を冷る　楚舟

沢山に盛る引菜の汁　洞志

いつも長く在るよりの淋　利合

九月晴れ　あり事切定　布志

押さへ船さん拝五六本　盛水
あり吹くるる暑い風来る　曽良
病中の前と花物を点じて　依て
年末法者出れ物乃ちやめ花　合
石の上塗ここに氷つめ　大
社下人ちつまとせず　風
小一町旁の間をとれる　志
多陸を行く　掲ふる浪　舟

こまの姫　疫疫ふへん月乃色　希
何やく不く　風を数代物　水
陸ちて花の色乃腰を　合
西の河ふくハう形の寺風　依
名
禅門乃貴て是一雄子一羽　水
蓼北亜場張会入て　掃き　大
暮蔵火角豆北夢よりこの　依
こ毛輝　りさあ吟てやる　風

取佐者ハ梯ヨ所ゐ〻〻乳を吞せ　舟
さ所の地震をくゝ形れ門に　希
生子にやりと重〻紀椒俵　風
兄の梯姫れ　重乳この秋　依
伊勢限ヨ京へ元より良屋盃　合
らくとみ〻〻乳沼の月代　志
貫ふゐと降ゐ　竜乳沼い出く　大
脱（脱カ）し待をゐゐくゐつけ　良

ウ
像前れ備をあけて仕舞ゐう　水
唐使停ゐくゐり後ヨ活　希
盃きくゐ宮生きも送やもの種　良
雨のくゐゐ門人ゆくゐ　舟
日ヨ形院品乃文婦連ゐて　志
苦杖とゐくゐすゐあゐ草　合

師匠は既七回の春をへぬ
四序乃すゑきに はきそ立る
事なく風くの忘れハ此庵室乃
おもゝ懐舊の句を綴て像前乃
俤思ふ残多物ゝきゝ花い画
ゝも白ひハゝ多ゝ人画ゝも懐ハ

ゝ多すさ絵ハ什畫像ゝ白ひて師の
花乃句を吟ゝきゝゝ夢のゝゝ
きゝ形句ひをます 杜鵑を吟ゝきハ
西ゝ舞 なりて 伸いまゝ世ゝ
ゝひをゝ 風雅ゝまゝゝ
ゝの夢をゝまゝ慕ゝゝかゝ

杉風

こゝ湯ばたくさせ十夜荒法の月　玉礫　砂旭

そよぐばかりやこの古池る蛙加及ん　宗拱

風ふくも所ハ竹藪や蛙の日　東旭

寒さきくを印るそまゝを向ひ　其奥

そせばきや西りなる八幡宮　梅節

洲乃わけ人多き山春　梅府

そゝりや地ゆ橋乃ゆ老　胤十

古池や蛙ゆきみ魚と百の志　桐洪

手すさびの白書くやうて散る葉
を焚かいくいく時ぞ乃ち
ちせば志やさをを待ちえて物思
ちちるに実ぞえくるるーれば
そくふるや梅ぢぢ枯れ枝
ものむ春ーー時雨
ちせば志に寄る年の白髪の橋
天ぢ梅ひの白の隙乃宝九め

角子
民玉
祇川
南畝
梅陳
洞風
梅祖
蛍素

はせば志や物ぬりの墨も歌集
叫ぶもしきそ白の白ちぢ枯
ぢ負の白白をみち枯ぢ
えぢの白やゆーーさくく戻
十くのむーぢ乃ーーく枯
ちくくよ春降ぬ白ちぢ塚
ちやちば志や漬をする人そ
枯枝に鳥影り白と毎ぬ

菅奴
松人
変雨
曲阿
南山
左拱
右拱
風曲

[illegible]　梅第
[illegible]　梅扇
御自傷[illegible]　吹石
[illegible]　寸羅
いさらゐ八雪[illegible]　野松
梅[illegible]　春江
[illegible]　百枳
[illegible]　永子

[illegible]　李卿
[illegible]　芦風
[illegible]　朗笛
[illegible]　楚風
[illegible]　入考
[illegible]　魚葉
[illegible]　鳳來
[illegible]　古遊

七十八翁　素丸

我泉

徳布

不二研

笠阿

素珪

斑象

柳規

鯉昇

簑里

錦谷

素連

鳥林

蒼谷

祇程

[illegible]や経[illegible]ゑも二尺浮　柳門
根ぐ[illegible]の玉世[illegible]拾[illegible]　東園
[illegible]ぎや併[illegible]　風葉
芭蕉忘やゆふ[illegible]　不門
[illegible]ひ[illegible]泪[illegible]塚の時雨　蛙朝
[illegible]忘やる[illegible]目の涙　上ヶ行川 梅林
[illegible]の[illegible]や[illegible]乃忌　里丸
[illegible]飯[illegible]花や塚の[illegible]尾[illegible]　内野 月庵

[illegible]も[illegible]の[illegible]
[illegible]乃忘[illegible]
[illegible]忘[illegible]
月[illegible]の[illegible]や[illegible]時[illegible]
[illegible]や小鍋[illegible]
[illegible]忘[illegible]
[illegible]ぬ書に[illegible]や[illegible]
枯[illegible]中に[illegible]香[illegible]

木更津 山冬
下総岩戸 宗雅
カツサ銚子 錦水
武蔵中野 恵明
〃 里藤
〃 文中
〃 枇林
〃 渡江

[illegible]

百負の碧[illegible]

一矢乃蓋[illegible]

[illegible]

人[illegible]

入[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋龍山

二木

紫東

東里

巴凌

熊谷月樵

笑牛

也好

祖師像前に

各搖香して

世[illegible]

[illegible]

包[illegible]

[illegible]

搖の月[illegible]

[illegible]

梅人

砂旭

宗拱

梅祖

東旭

右拱

[illegible]

蒼谷

[illegible]の新[illegible]の梅　人

[illegible]の枝の雪　梅　砂

[illegible]の[illegible]　宗

[illegible]月[illegible]　祖

仮寝の[illegible]れ[illegible]　東

[illegible]す[illegible]の新[illegible]　右

[illegible]も[illegible]　谷

芭蕉翁の桃[illegible]仙も

[illegible]の[illegible]月[illegible]

[illegible]の芭蕉の[illegible]

[illegible]寒　[illegible]日

[illegible]人[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

釈摩訶

阿山

白陳

梅賀

里鈴

作紙

湖月

成義

[illegible]
芭蕉忌や赤々と論ずる初ざくら　洛　重厚
立ちもし持てその後も七ちまで　湖南　其由
こゝろの寒ぶれ菜乃ちや十二日　完来
野逸

責馬に一汗入る秋芝風　人
月の亭を秋寒れ出す　砂
ちゝ[illegible]を[illegible]の[illegible]を打[illegible]　宗
井戸の底を移せば古池　祖
よい[illegible]ま降て時る春の雨　東
小さな傘を交る師匠　右
かさ[illegible]踊女り着も幼子　谷
屋子[illegible]八[illegible]乃[illegible]義　人

風寒く雁の声鶏に近き声　砂

五条あたりの四五丁　宗

垣ぬし後の寝覚枕て　祖

綿の手葉の閑伽の手向　東

辻堂の苔の小静　右

夏草の沈はの夜おもよ　谷

餅搗て苗振後の朝の月　人

なのしるの寒く鶏　砂

おそ鳴て遠も後きて　宗

桃えも沈遠後ものく　祖

きみ山の月もく小六月　東

雑炊の後ぬ昔訪る　右

も遠ぬ山ひ掛く水くく　谷

その夏の深よ戻る春　執筆

附録

食ものゝ楊枝つゝひに梅乃下

杉風

学し書為にまて毒けを

梅人

洛ものゝ梅乃粉屑きき

砂旭

学て拾ものゝ唐藺代衣

播州 青羅

うゝもまゝ内侍変の跡のゝ

洛 蝶夢

降あゝ藤しみゝかゝゝ花の面

イセ 離芳

ゝ原の面ゝ孔雀ゝけを

砂旭

傘で釣根こえて春の雨　宗拱
菜の花や入り日出る山の宮　百之

旅の吟

寺の名に白き乃鶯てそなれ
月花乃ゆ出て梅や鍬そめ　俳諧　語曰
むらさきの水やみなそこ　砂旭
門前城静なる山さくら　下絵　調星
おのれに咲くるかなるの宮　東旭
　　下絵　既酔

スくふ五月の雨をてゆかり　杉風
ゆく春に名残を惜しいろ　梅人
ふる移り新き人の　砂旭
傘ぬ〻ぬ姫わらうきつる　東旭
懸さゆる蓮ひるをみをつて　里谿
稀ゆ東を吹きぬ　霊山　梅舟
二日ろ中咲ぬ牡丹　砂旭

鉢植や故の残るあやめ草　如蘭（下総佐倉）

那須の温泉やうく涼さもまさる　王壺（ハクハ）

涼しさや世々経て推り宿　砂旭

涼しさや松風の音の筆の音　生水（下総花巻）

戸寵乃そそかしあやめの筆　聽松

夕立の降さおそるる涼この雑　梅水（高）

温泉の湯桐胎ちそ後景ぐ　砂旭

七鳴き歎乃華やさ月晴　宗拱

秋の夜や二階の音も扉ぐる　枚風

名月や雲の名八音や裏表よりと　梅人

秋風や仏像乃色也　砂旭

雲をのこして力入る雲むし　梅路（下総久喜）

名月や雲に笠かるの古　浦人（ウラヘ房）

己り影見てし時月の扉　李庭

葬乃一論秋の光　砂旭

我仲寺菊花係か孫あるみて

菊の花に寸くてきり〳〵す　東旭

初霜や牡丹の太りいさきよき　宗拱

玉掛や素麺屋の物干し　房天庫 一法

菊の花焼くと叶ふ下　砂旭

菊咲や使ひ乃町中　下鬼 如水

引抜や庭種ひろひて笠の内　古サ 金石

すゝけ形き枚乃うら張に残る蓑　蒼谷

去形あれて作よう形一枚の朝　枚風

作り木も捨てゝ残る柳あるさぶ　梅人

風や横ぶの行る月夜　砂旭

冬ごもり捨りるりタ〳〵ゝ　宗拱

炭竈や去らぬの山八温泉の煙　東旭

おもひやる富士のきゝ砂雪　梅七

住やまて枯也乃果ぶゝ車　浪花 尺艾

かき枝ゝ風のきく寒さかな　巣和

事多くぬ年の新るまゝ　梅静

そしはのもゝ〳〵ゝ俳歌の名　砂旭

玉代婦子義仲ちや初志れ

と人ゝる句ゝ義人しゝ打のゝ蓮菊松葉ゝの

免ゝゝ乃事丸ゝ乃ゝ事ゝ日ゝ家ゝ飛ゝ

日ゝゝ市蓮ゝと人ゝ毎ゝ食ゝ志ゝ

の義ゝ乃ゝ事ゝ市ゝ蓮ゝ盛ゝ有ゝ盛ゝ

松ゝ伊ゝ夏ゝ乃ゝ人ゝ毛ゝ彼ゝ伊ゝ有ゝ新ゝ後ゝ七ゝ彼ゝ

ゝ乃ゝ打ゝ凡ゝ一ゝ有ゝ理ゝ迄ゝ方ゝ去ゝ師ゝ之ゝ

代ゝ市ゝ行ゝ打ゝ一ゝ毛ゝ世ゝ市ゝ乃ゝ

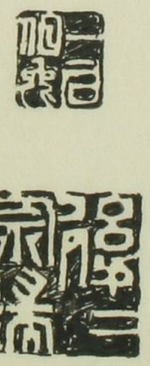
市ゝ代ゝ二ゝ日ゝ之ゝ毛ゝ之ゝ市ゝ代ゝ死ゝ出ゝ小ゝ撰ゝ

婦ゝ毛ゝ地ゝ打ゝ乃ゝ凡ゝ之ゝ高ゝ中ゝ

もくもくに納受ありてこれに芭蕉庵と称する所の
おそれ和歌三神（住吉明神の御ことなり）の御
そなはりましまして九流ありて庭代
ともがらの群乃聲ありて四時みむしの
音くるるを少めも

寛政戊秋

白兎園後学宗瑞坂



昭和十三年秋九月七日　写校合了　松岸文庫本ニ見ル

俊定